

月夜の箱根峠越え・^{おい} 笈の^{たいら}平

(神奈川県足柄下郡箱根町)



笈の平



親鸞聖人は、東国の教化を終えて帰洛の途中、現在の箱根旧街道にある「笈の平」にて付き添ってきた性信房とこの地で別れたと伝えられています。箱根の旧道にある有名な甘酒茶屋より100メートルほど下ったところに、遺跡碑と「病む子をば預けて帰る旅の空、心はここに残りこそすれ」と関東との訣別を詠まれたというその歌碑が建っています。

笈の平のお話

笈の平はな、昔、^{おおたいら}大平と呼ばれていたぞな。ある日の夕刻、東国での布教を終えた親鸞聖人が、4人の弟子を連れてここへたどりついた。見ると腰掛けるに手ごろな石がある。急坂をあえいで登ってきたところなので、「これはよい」と腰をお掛けなされた。このとき親鸞聖人は「病む子をば預けて帰る旅の空、心はここに残りこそすれ」という歌を詠まれたぞな。東国で布教し、せっかく大勢のわが子とも思う入信者を得ながら、十分に教化をせぬまま帰るその心残りをうたわれたのじゃ。

そして、4人の弟子の1人、性信御房に向かい「師弟打ち連れてみな上洛してしまつたら、あとに残された東国の門徒はだれが導くのか。御房はこれより立ち帰って東国の門徒衆を教化してもらいたい」

こういわれたのじゃ。聖人の急な申し渡しに、御房は驚き、嘆き、悲しんだ。しかし、聖人の門徒を思う深い慈悲の心を察すれば、従わないわけにはいかなかったのじゃ。

御房が泣く泣く承諾すると聖人は喜び、かつての師の法然上人とともに、越後へ流されたときに刻んだ仏像に添えて、自分の身代りにと笈を御房に手渡された。笈というのは今でいう書箱のようなものじゃ。このつらい別れをしのび、それ以来土地の人は大平を笈の平と呼び変えたのだそう。

「箱根・平成2年7月 神奈川新聞社刊」より抜粋

親鸞聖人は、性信房と別れた後、箱根権現に逗留し帰洛の途についたとされている。その際の様子を『相州箱根山安置親鸞聖人木像略縁起』では「8月16日相模の国 国府津のさとを発せられ、京師におもむき箱根の陰阻にかかりたまふ。遠近の道俗はせあつまり、我も我もと御名残をおしみ、今世の拝顔いまをかぎり老若男女御衣のそでにすがり悲泣雨涙のありさま」とし、親鸞聖人が「恋しくば南無阿弥陀仏となふべし、我も六字の道にこそすめ」と1首お詠みになられたと記述されている。